

歴史家としてのゴンクール兄弟

鈴木 豊

歴史家は過去の語り手であり、小説家は現在の語り手である。(1864. 10. 24)

I 生涯

「ところで文学における真実の探求，十八世紀芸術の復権，日本趣味の勝利。これはね，わかるだろ…これはね十九世紀後半の文学，芸術の三大運動なんだよ…われわれはこの三大運動をリードしたんだ…われわれみたいな哀れな名もない男がね。けっこう！ これだけのことをしておいて…未来においてひとかどの人物にならないなんて，まったくむづかしいことだよ」。

引用はジュールが死の二，三カ月前，朝の散歩のうちに語った言葉として，エドモン・ド・ゴンクールが『シェリ』^[1]の序文で紹介しているものである。ジュールは1870年6月，40歳にみたくに病死しているのだから，その二，三カ月前といえは，同年の春のことと考えられる。当時彼の病状はすでに絶望的で，生活の一部になっていた日記の筆すら執れなかった。死の足音をすぐ背後に聞いたジュールのこの言葉は，すでにこれだけのことをやったんだから，という自負や諦めの述懐とは思えない。まだまだやりたいことは山ほどあるが，こんな短い命では，という不本意な気分を訴えるものであったろう。ジュールが兄エドモンとともに手がけたことは，しかしこの三つだけではない。そこで兄弟の

特異な生涯を紹介するとともに、二人の文学者としての活躍をながめてみよう。

兄エドモン **Edmond-Louis-Antoine HUROT de GONCOURT** は1822年ロレーヌ州のナンシーに生まれた。ワーテルローの戦いから7年、大革命、ナポレオン戦争と続く動乱の余燼おさまらぬ時代である。翌年一家はパリに移り、その7年後に弟ジュール **Jules-Alfred** が生まれる。父方の一族はロレーヌで役人、法曹家などを輩出し、兄弟の曾祖父は1786年にヴォージュの小村を買ひ、領主権を得ると同時に貴族になったが、本質的にはブルジョワである。のちに貴族の称号を制限する法令がでると、兄弟は何度もその復権を提訴しているが、貴族というこの地位は彼らの意識や生活態度に深い影響をあたえている。兄弟の父マルク **Marc-Pierre** は16歳にして士官学校に入り、卒業後ナポレオン軍の士官としてイタリア戦線で活躍して勇名を馳せたが、ポルデノーネの戦闘で瀕死の重傷を負った。のち奇跡的に復帰してデュルバル將軍の副官としてフランス、ロシアに転戦し、モスクワ遠征でふたたび重傷に倒れた。右腕が不自由になって、退役を余儀なくされたものの、心底からの軍人であった彼はたえず現役復帰の手続きをとった。しかし皇帝への忠誠が裏目にでてついには生涯目的をはたせなかった。初婚の妻が早世すると、アネット・ゲラン **Anette-Cécile GUÉRIN** と再婚する。兄弟の母である。彼女の父は軍に物資を納める御用商人であったが、その母系はモンメルケ、ヴィルドゥイユなどの大貴族の末裔に連なるので出自は夫より正しい。戦傷の後遺症による肉体的な欠陥と、無為な年金生活に不遇の日々を送っていた父が34年に死ぬと、兄弟は母親の手で育てられることになった。

学齢に達したエドモンはグーボアの学寮の寄宿生になり、さらに名門アンリIV世校に進む。そして18歳でバカロレアを通ったときには、画家か、でなければ古文書学校 **L'École des Chartes** に進んで歴史家になることを志望していたが、母の希望で法律を学び、代訴人事務所をへて、財務局へ入った。とはい

え心ならずも就いたこの職に熱中できるはずはなく、勤めはまったくお座なりで、古書や美術品の蒐集に日を送っていた。一方ブルボン学院に学ぶジュールは、数年は優等生で通したものの、しだいに正規の学科に興味を失い、文学や芸術に惹かれ、そのうえ病弱な体質は母の悩みの種であった。

兄弟が学んだ時代、十九世紀の学校教育の根幹は、ギリシア、ラテンの古典と、フランス大世紀の古典主義であった。古典語がフランス語に優先し、日常のフランス語より古典主義作家の理解に重きがおかれていた。歴史家のラヴィッス E. Lavissee は、「わたしはアウグストス時代のアテネに、ルイ XIV 世時代のヴェルサイユに生きてきた」²⁾と述べ、進歩派のギゾー F. Guizot でさえ、「ラテン語がなければ、われわれは知性の面では成り上がり者にすぎない」³⁾、と言っている。こうした徹底した古典教育を受けた十九世紀の知識人は、いやおうなく優れたラテン的教養をみにつけ、ボードレールやランボーはラテン語で詩を書き、ジッド、ヴァレリィが死の床で読んだのはウェルゲリウスであった。皮肉なことに、こうした教育は兄弟には逆に働き、古典への嫌悪をうえつけた。彼らが学校での教科からはなれ、文学や芸術に走ったのは、その天性の資質もさることながら、こんな教育の反動であろう。「古代というのは、教師の糧になるために作られたものかもしれない」⁴⁾という彼らが、古典をさけて近代文学を好んだのは自然のなりゆきであろう。

父方については兄弟はあまり好感をもっていないが、母親には無条件の愛情を抱いている。これには母方の血筋にたいする憧れもあったろうが、マダム・ド・ゴンクールが文句ない良妻賢母型の女性であったためでもあるだろう。夫の死後は社交生活もやめて家にひきこもり、ひたすら二人の息子の養育にはげみ、幼い弟の勉強までみてやった。48年にその母が、滞在中のマニイの館で病死する。その死は兄弟にとって深い悲しみであった。「哀れなお母さん！ 苦しみと失意の生涯！ 二人の幼い娘を亡くし⁴⁾！ ロシア戦線での負傷と、健康を損ねてたえまなく苦しんだ夫との生活…哀れなお母さん、世間から身を引き、

夜はもはやどこへも出掛けず、弟の勉強の愛情溢れる先生となったお母さん…マニイの館で臨終の床に横たわる姿が目浮かぶ…情熱にはやったまま人生の門口に残され、いまだに定職の道に就かないまったくの若者がこの先どうなるだろうという不安に悩む母の顔、忘れがたいあの眼差しを注ぎながら、口をきく力もなくわたしの手と弟の手を握らせた母の姿が目浮かぶ」(92.3.18)。

翌年ジュールがバカロレアに通ると、哀れな母の不安は現実になった。ジュールは親友のバッシイ宛の手紙に書いている。「ぼくの決心は固い、誓いも、忠告も、満腔の友情を捧げるきみですら、なにもぼくの決意を変えられないだろう。不適当だが使いふるされた表現を借りれば、ぼくはなにもしないだろう…ぼくにはなんの野心もない。奇妙だがそのとおりなんだ。たとえこの世で最高の地位、最高に収入のいい職が与えられても、ぼくはそれを望まないだろう」⁶⁾。彼らは物質的な繁栄と進歩を標榜する、十九世紀の市民社会に背を向け、無用者として、文学、芸術のただの愛好家として生きる決心をしたのだ。十年ほど前に、ボードレール、フローベル⁶⁾も同じような無用者宣言をしているが、日々の糧を筆一本に頼らなければならないバルザックやゾラと違って、貴族的な悠々自適を許される彼らにしてはじめて可能であった。のちにテヌに語ったところでは、兄弟は約10,000フランの年収を自由にできたというが、これは当時の本庁の局長級の給料の二倍にあたるという。こうして彼らは旅行に、読書に、芸術品や資料の蒐集に、小説の習作にほぼ二年の月日を送るが、これが彼らの作家としての充電期間になる。

ゴンクール兄弟の文筆家としての第一歩はジャーナリズムに始まる。52年、母方の親戚の一人が新聞発刊の計画をもちかけたとき、元来この仕事に魅力を感じていた兄弟はふたつ返事で賛成し、こうして文学、演劇、芸術週刊誌「レクレール」*L'Éclair* が創刊され、さらに数カ月後にはこれが日刊芸文紙「パリ」*Paris* になる。同紙には、すでに文壇に名のあるミュルジェル H. Murger、ショール A. Scholl、バンヴィル T. Banville などが寄稿し、ガヴァルニ

Gavarni が毎号デッサンを載せるという気のいれようであった。兄弟は作家や芸術家たちの人物月旦、劇評、美術文学批評などさかんに書いているが、これがパリ生活観察家として、モラリストとしての眼を養い、のちの作家ゴンクール兄弟の誕生に大きく貢献している。しかし遠大な計画、壮大な意気もむなしく、編集にも、営業にもしろうとの手になるこの新聞は永続きはしなかった。おりしも成立したばかりの、不安定な第二帝政当局は政治活動に神経をとがらせ、きびしい出版規制をつぎつぎに行ない、その年の終わりには兄弟の記事が風俗壊乱の罪で起訴された。法廷では罪を免れたものの、この筆禍事件に嫌気がさした彼らは、事業から手を引き、新聞は廃刊になり、兄弟はこの社会と袂を分かつことになった。

新聞事業のかたわら、彼らは小説の執筆をはじめ（この頃から『日記』をつけはじめるが、規則的につけるようになるのは55年から）、51、52年と習作を出版し、53年には『ラ・ロレット』“*La Lorette*”を自費出版し、一週間で六千部を売り尽くす好評をえた。しかし彼らの関心は主として歴史に向かい、さながら修道僧のように研究に没頭し、55年に『大革命下フランス社会史』を発表後、70年までほとんど毎年のように歴史書を出版している。

過去を掘り起こし、きのうの風俗を再現する歴史家と同じ眼で同時代を観察し、忠実に記録する小説作法を思いついた彼らは、60年の『シャルル・ドゥマイ』“*Charles Demally*”（初名『文学者たち』“*Les Hommes de lettres*”）で小説家として認められ、65年『ジェルミニ・ラセルトゥ』“*Germinie Lacerteux*”を発表するや一躍文壇の注目的になる。ロマネスクな要素をまったく捨てて、ひたすら社会と人生の真実の絵画を描くことを標榜した彼らのいわゆる記録小説は旧派の激しい非難を浴びる一方で、フローベル、ゾラ、テヌなど多くの賛同者をえて、新しい文芸思潮、写実主義の基礎を確立した。

いくぶん揶揄をこめた渾名で、兄弟はジュールモン Juledmond と呼ばれる。エドモンとジュールを一体にした名前である。そしてゴンクールという名

には les という冠詞がつき, frères という字を伴うのが普通である。彼ら自身, je を用いずつねに nous と書き, そのくせ実際には一人, 単数として扱われる。ともに生涯妻帯せず, 住まい, 食事, 散歩などの日常生活はもちろん, 研究, 執筆, 旅行, 交友なども二人で, 娼家にも手をたずさえて出掛け, 女性までも共有している。寝室でも, 競売で買い込んだランパール公妃の大きなベッドに同衾していたというから驚かざるをえない。独立してから弟の死まで, 22年間に二人が離れたのはただの一回だけ, ジュールがルーアンへシャトール夫人の資料を探しにいったときだけだった。当時パリで「ジュールの影がもうエドモンを見えなくし, エドモンの影がジュールを消してしまう」と囁かれたというから, 彼らの異常な生活ぶりはすでに有名だったのだろう。

ゴーチエによれば, 二人が見間違えられるのがむしろふしぎなほどだというのが, 外見は対照的である。ジャポニザン, ビュルティ P. Burty の家で兄弟に会ったトゥーリエ A. Theuriet は二人の印象をこう書いている。「…二人の男がほとんど断定的な口調で交互に喋っていた。一同明らかに敬意をこめて彼らに耳をかたむけていた。一人(ジュール)は小柄で, 外見は繊細, 物腰は優雅で, とてもパリ風な洗練された表情をしている。もう一人は大柄で, がっちりした体付き, たっぷりした茶色の髪, 意志の強そうな額, 厚い眉の下の生き生きした探るような眼差し, 出っ張った顎, そしてあまり人好きのよくない口を半ば隠した濃い鼻下髭が, 知的でぶっきらぼうな田舎貴族のようにみせる」, そのくせ二人はひとりの同じ人物のようで, 「一人が話の口火をきり, もう一人がしめくくる」^[7]。ゴーチエの娘で詩人のジュディット Judith Gautier はさらに, ジュールの「金色がかかった渦巻状の鼻下髭の下には, 熟しきっていない大きなサクランボのような感じのふくれた下唇」が見えるが, エドモンといえば, 「髪はずっと茶が勝ち, 四角な顔, ピンとはねた髭は, いつも銃士のようなそんな様子を見せて崩さない」^[7], とつけ加えている。容姿と同様に気質も正反対で, このことは当人たちも十分心得ていた。エドモンはジュールの死の

おりに、ゾラ宛の手紙に、「わたしは憂鬱症で、夢想家ですが、彼（ジュール）は快活で、才気潑刺、論理的で、皮肉な性格です」⁸⁾と書いている。またジュールは自分たちの気質をこう分析している。「わたしたちは両者が同じ憧憬を抱いていない。彼の本質は、現在はそうでないにしても、家庭であり、小市民的の夢であり、感傷的な女性との共同生活の理想だろう。わたしは憂鬱な物質主義者であり、彼は気の優しい、憂鬱な情熱家なのだ。わたしは自分が十八世紀の神父のような気がする、同時にまた、血や、残虐さや、肉体の苦痛を怖がるくせに、意地悪な気持を好むような、十六世紀のイタリアの皮肉な腹黒さという一面もある。エドモンにあっては、反対にほとんど純朴なところがある。彼はロレーヌ生まれでゲルマン気質だ…わたしはパリ生まれのラテン系だ。エドモンは他の時代だったら申し分ない軍人だ。自分でもロレーヌの血を、打たれても嫌がらない体を、夢想への愛を認めている。わたしときたらどちらかといえば、掛け合いごとや仲間内の駆け引きに首を突っこんで、わたし自身のために皮肉な見世物を見せて、男や女を奔命に疲れさせて鼻高々になる。かつてそんな社会の定めがあったように、ごく自然な兄と弟の宿命といったものがあるのだろうか？」(65.8.29)。

そしてこのあと、ジュールはこうつけ加えている。「奇妙なことだ！ ところが結局、わたしたちのうちには気質の、趣味の、性格のまったく文句ない相違があり——そして無条件に同じ思考、同じ判断、人に対する同じ好感と反感、同じ知的な視点がある。わたしたちの脳髄は同じように見、同じ眼でものを見るのだ」。たしかに彼らの事物に対する考え方、意見はもちろん、瞬時に変わる精神状態、喜怒哀楽の情まで、まるで示し合わせたように同じ動きを見せる。「わたしたちは何から何まで、どちらを見てもまったくの双子児で、太った女に対する好みまで同じだ。庭のあるキャベツに、小便をひっかけてやろうという考えが、今夜二人の頭に同時に浮かんだ」(61.7.12)。「もしそれがあるとすれば、愛というものがどうあるべきか、いま理解する。肉体面を除けば、

性の結びつきというのは、わたしたちのあいだにあるものを言うのだ——つまり、一人がもう一人と一緒にでないときには二羽でしか生きられない鳥の番のつがいのような半端ものになる。わたしたちには半分の感覚、半分の生命しかない。一方と引き離された一人は、われわれ自身の欠けた半分である。二巻のうち第一巻がなくなった一冊の本のように、不完全なものである。愛がどんなものか、わたしはこう考える。といて、愛とはこんなものだろうか？ 二つの心の合体に、精神の結合、われわれだけに特別なもの、精神的なものすべての結合をつけ加えなければならないのではないか？…愛を自分たちの兄弟愛に比べて、わたしは愛を美化していた」(59. 11. 15)「いまやわたしたちは同棲している女たち、その健康まで同化して、同時にメンスがくる女たちのようなものだ。わたしたちには頭痛が同じ日におこる」(66. 12. 20)。こうして彼ら自身異常を感じているくらいだから、単に仲のいい兄弟だけではすまされないこの八つ違いの一卵性双生児が、世間からはいかがわしい関係と誤解され、近親相姦とかホモセクスとかいうスキャンダラスな噂がたってもふしぎではない。

兄が確固とした計画のもとにこつこつと努力を積み重ねる勤勉、寡黙な内向型、弟は熱狂しやすく能弁で、いささか軽薄な発散型という性格は才能にも現われている。グールモンはこんな比較をしている。「ジュールは書いた、驚くほどもごとに書いた、彼は書くことを知っている。エドモンは裁断し、縫い合わせる。しかしこの仕事では、縫うということには、切れ端を縫い合わせるという以上の効果がある、それは同時にこまごましたデッサンと、作品全体の調和を具現することである」⁹⁾。エドモンが膨大な資料を漁り、整理し、綿密に作品のプランをたて、ピトレスクな才能に恵まれたジュールが、のちに「芸術的文体」*Écriture artiste* と呼ばれる凝りに凝った独特の文章にして紙に移す。エドモンは『日記』について簡潔に、「原稿全体が、二人の口述をもとに、弟の手になる。これがこの手記をかくためのわたしたちの作業方式である」¹⁰⁾、と述べているが、エドモン直接の聞き書きによる『ゴンクール兄弟伝』の作者デ

ルザンはさらに具体的に説明している。二人にとってきわめて重要な書出しと結末について、「それぞれ部屋に閉じこもって、同じ章をかいた。それを読み上げ、優れた方を採った」。そして永い日時をかけて仕事が終わると、それぞれの原稿を取捨選択して、まったく無理なくまとまったひとつの作品になるように調整し、つぎにあいだの部分も同じ方法で埋めてゆく。そして「兄弟はすぐに、黄色いザラ紙の四つ折り版のページに、彼らの本の写しをとっておく習慣があった。一枚一枚縦に半分に折る。右側に（推敲前の）文が書き付けられ、左側は書き替えと、追加分にあてられる」¹⁴。

女性にはかなり積極的であったジュールは、しばしば娼家の客となり、50年9月にル・アーヴルの近郊で梅毒に感染する。生来蒲柳の質の彼は、この忌まわしい、不治の、緩慢な病毒に悩まされ、70年6月、兄に先立って39歳で不帰の客となる。半身を失ったエドモンの悲嘆、苦悩、絶望は想像を絶するものであった。もはや単なる落胆や哀惜ではない。ジュールの死は同時にエドモンにとっても死を意味した。少なくとも文筆家としての生涯にはここでひとつのピリオドが打たれたようにみえた。「何ヵ月かすぎて、わたしは弟の手からすべり落ちた筆を再び執っている。わたしはこの最後の記述で、弟が自分の青春を、子供時代を振り返りながら死の床で書いたこのノートで、日記をとめたいと思っていた。『この本を続けたところで何になろう』、とわたしはひとりごちた。『わたしの文学的生命は終わったのだ。わたしの文学的野心は消え去ったのだ』と」¹⁵。エドモンはその後四半世紀、二十世紀の曙光が見えるまで生き続けた。没年74歳、平均寿命50歳の時代としては、ユーゴーにつぐ長寿である。弟の死後、エドモンは単独で『娼婦エリザ』“*La Fille Elisa*” (77年)、『シェリ』などの小説、数編の小説の劇化、『歌麿』“*Outamaro*” (91年)、『北斎』“*Hokusai*” (96年)を出したが、浮世絵研究以外にはみるべきものはない。

伝記作家フォスカは言う。「1870年6月に死んだのがエドモンだったら、生き残ったのがジュールだったら、と自問するのは不遜だろうか？…わたしが思

うには彼（ジュール）はエドモンが晩年に没頭した例の歴史や、日本趣味の特殊研究のどれも出版せず、彼が書いたであろう小説は兄が創った小説とは大いに違っていたろう。その作品はいっそう肌理こまかく、軽妙で繊細で、またいっそう人間的で、とりわけずっとみごとな出来栄えになったろう、と思う…ゴシック・スタイルを、芸術的文体をこれほどの完成度に高めたのはジュールなのだ。エドモンはジュールの死後、それを誇張し、硬化させたので、エドモンがその文体を創ったわけではないのだから。最後に、1895年にはオートゥイユの家には、エドモンが25年間に積み上げた装飾品や美術品の第二部は詰まっていなかったろうとわたしは信ずる…

「おそらくジュールの知力の衰えは、エドモンにとっては、肉体の病以上に、考えられないほどに苛酷な拷問であったろう。彼と弟はただ深い愛情で結ばれていたばかりでなく、また20年来たゆまず続けた共同作業で、彼らの生活と精力を捧げた文学の仕事で結ばれていた。ジュールを失ってエドモンは弟を、喜びと苦みの最愛の伴侶を失っただけではない。彼の脳葉が壊れたようなものだった。このように四肢をもがれて、どうやって生き続け、書き続けることができたのだろうか？」

弟の死後、エドモンの業績はたしかに乏しい。ところが二十世紀後半になって、彼ら自身が忘れていた作品、まったく予期しなかった歴史がにわかに脚光をあびたのである。

II 新歴史

事実上の処女作ともいえる『ラ・ロレット』が発売されたおり、この本に『恐怖政治下の快樂史、タタール人の陣地』“*L'Histoire du Plaisir sous la Terreur ou Le Camp des Tartarres*”の近刊予告が載っていた。兄弟は最初、大革命下のパレ＝ロワイヤルの歴史を書くつもりであったが、この意図はしだいにその内容が拡がり、1789年から1800年までのパリ社会史、さらに十八

世紀全般の社会、芸術、文学生活の絵巻を繰り広げようという、壮大な計画に変わっていった。その第一の成果『大革命下のフランス社会史』が54年3月に発刊されると、兄弟の大構想はつぎつぎに実現される。『ルイXV世の寵姫たち』の序文は、その構想をこう説明している。「本書を読者に贈ることにより、わたしたちはみずからに課した仕事を終わった。書こうと試みた十八世紀史がいまや完全なものになる。ルイXV世からナポレオンにいたる時代の各時期、国家と風俗の一つひとつが、わたしたちの信条と技量に従って研究されたのである。『ルイXV世の寵姫たちの歴史』は読者を1775年に導き、『マリ=アントワネットの歴史』は1775年から大革命まで案内し、『大革命下のフランス社会史』は1789年から1794年まで導き、『総裁政府下のフランス社会史』は1794年から1800年までを案内する。かくして全世紀がこれら四つの研究に含まれている。そしてそれはわたしたちに先立つ時代、現代という世紀が、現在の祖国が生まれた時期の四つの年代といえるものである」。そして彼らは九編ほどの歴史書の執筆⁽⁴⁾に約十年の歳月と、数千フランの資料費と、精力を捧げることになる。

ブルジョワの時代といわれた七月王政下では、政治ばかりでなく文化全体の流れに大きな変化がおこったが、歴史学もその例外ではない。ユーゴーを将帥とするロマン派の作家が、歴史、宗教、神話の中に題材を求め、人間の理想的な姿、その偉大さを描いたのに反して、バルザック、フローベルなどの新しい作家たちは、人間のありのままの姿を見つめ、ときにユーモアや皮肉を交えて、赤裸々に描くことに専念した。1831年に出版者ラヴォカが現代風俗の集大成『パリ百一年の書』⁽⁵⁾を出版し、これに続くキュメルの『彼ら自身に描かれたフランス人』⁽⁶⁾の発行もこの気運に乗じたものであった。39年5月から42年4月まで、週刊で222巻で完結したこの現代百科事典には、当代一流の文学者や詩人が執筆し、その序文はジュール・ジャンン J. Janin が担当している。「人類を忘れた歴史家たちは、包囲陣だの、戦闘だの、被占領、被破壊都市だの、和平、戦争条約だの嘘八百の、血塗られた、とるに足りないあらゆる種類の事

柄を語って楽しんできた。彼らは、人間はいかにして戦ったかを口にしたが、いかにして生きたかを語らなかつた。日々着ているマントには気をかけずに、この上ない細心さで鎧について述べてきた。法律に関心をもつても、風俗には眼もくれなかつた…事実数えてもみたまえ、なんと僅かなモラリストしか、あえて日常生活の単純な細部に足を踏み込まなかつたかを」。

十九世紀中葉まで、革命と十八世紀は歴史家にとって流行の話題であり、七月王政の確立とともに、十八世紀の文学、芸術は見なおされてきた。ビュルク Burke, ド・メーストル J. de Maistre, チェール Thiers, ミニエ Mignet, キネ Quinet, ミシュレ Michelet などがそれぞれの持味で纏めた革命史は、明快な分析のきわだつトクヴィルの『旧制度と大革命』⁹⁴(56)、仮借ない解釈を下したテーヌの『現代フランスの起源』⁹⁵(67~96)によって完成された。両著ともに、旧制度の社会や風俗の変化にまで遡ることによって、革命の具体的遠因の追求を主軸におき、事件史は従として扱っている。

兄弟は二回にわたって、歴史的事実への彼らのアプローチと、自分たちの任務とする目的を説明している。といっても、彼らがヘーゲルに比肩すると説くのは買い被りで、彼らにはヘーゲルほどの哲学的な規模はないし、また兄弟自身、ヘーゲルやマルクス流の、歴史上の変革には法則があり、その中にひとつの意味を見いださうという主張にはむしろ否定的である。彼らにとってはその歩みは行き当たりばったりであり、歴史は盲目であった。

『十八世紀の親しい面影』の序文は彼らの最初の歴史論である。文明が始まるとき、歴史はドラマであり、武勲詩である。ヘラクレスを、ローランを語る時、歴史は運動している。歴史は、その肉体が活動している状態の人間について述べる。外側から人間を描いている。ところが世界が落ち着くときがくると、「思想が事実の武装を解き、近代の汝自身を知れ *gnothi séauton* が民族の熟した精神を新しく変え、ハムレットが現われ、心理が生まれ、人間は自分自身に耳を傾ける」。こうして歴史家の視点はヒーローからただの人間に、行

為から動機へ、肉体から魂にうつる。

前時代までは、歴史家には、人間の特性、その才能の描写しか要求されなかった。政治家、軍人、詩人、画家、偉大な学者や職業人はその役割の中においてのみ、公的生活として後代人が継承する彼らの作品や努力の中においてのみ示されてきた。十九世紀は、この政治家、軍人…がかつてあったままの人間の姿を要求する。その関与者としての人間 *âme*、その精神のうしろに生きた心、それが要求され、求められる。これこそ歴史の新しい興味であり、歴史家の新しい義務である。ものを軽視しないこの学問、小さくならずあらゆる細かいところまで降りるこの絵画、一粒の砂から人間の小世界を再構成すること、これが私生活の歴史 *l'histoire intime* である。後世のひとびとが人間の歴史 *l'histoire humaine* と呼ぶであろう本当のロマンである。

さらに『ルイXV世の寵姫たち』の序文は説く。この新歴史は社会全体を包含するものであり、ただに民衆の公的行動、あるいは政府や社会的組織のおおやけの、外面的徴候、戦争、平和条約などを語るものではない。「社会の歴史は政治史が忘れ、あるいは軽蔑していた歴史に密着するであろう。それは人間種族の、一国の私生活史になるであろう。人類の精神革命、文明の一過性の地方的形態を研究し、明示するであろう…それは女性、歴史に過小評価されてきたこの大女優に、近代人が風俗と世論を通して、彼女に用意した地位を作るであろう…歴史は逸話からその人物像、粘土像を作り出すであろう。それはいたるところで反響を、きのうの生活を探し求めるであろう。その制度のルールとなる一時代の秘密を見いだすために、あらゆる回想記から、ごく些細な証言から着想を受けるであろう。これこそ社会の精神、古い世界の律法の失われた鍵である」。これを要するに、宗教の意識や儀式、衣装や衛生、食事の内容や食卓生活、家庭や教育、読書や劇場、老人や青年、売春や社交婦人などが歴史の対象になる。

こうした身近な材料ならいつの時代にもことかかないが、彼らにとっては

「衣装の見本や晩餐のメニューのない時代は死んだ時代だ、人の興奮を呼ばない時代だ。そこには歴史は甦らないし、後代人は再びそこに生きることにはできない」(59.6)から、当然遠い過去は彼らの射程外になる。直結した過去、彼ら自身が相続人になる時代のみが対象になる。「ルビコンを渡るカエサルなどわれわれにとって何になるのか？ 古い歴史など聖遺物だ！ しかしシュリ夫人の不倫こそわれわれの古典になり、われわれの時代であり、われわれの心を打つのだ…過去に興味を抱くためには、それが心に、感覚にまで甦らなければならない。頭に浮かぶだけの過去などは死んだ過去だ」(61.9.19)。こうしてエドモンは「もっともつまらぬ心理小説のほうがホメロスより心を打つ」(61.5.11)と極言し、ジュールは「どう考えてもギリシア人にはげっそりだ」(62.6.19)と肩をすくめる。ところが伝統的歴史家の遍見は根強い。古代人を研究テーマにして、「ローマ人の靴のはき方」について本を書く学者には、アカデミーへの道が開かれるが、「われわれの時代に近い世紀、広大な世紀を選んでみたまえ、海のような資料をかきまわし、一万部の小冊子、五百部の新聞を手にとり、それらすべてから特殊研究でなく、一社会の精神の復元を試み、十八世紀および大革命のもっとも奥に隠された性格を見付けだしてみたまえ、諸君は愛敬たっぷりな詮索家、かわいい野次馬、行儀のいい出しゃばり屋以外のなにものでもないであろう。フランスの大衆はまだそれに関心を寄せることを、歴史にゆるしてもらえないのだ」(63.1.25)。

こうした新しい歴史を書くに当たって、彼らはあらゆるものを利用した。すべての証言、すべての資料を考慮にいった。具体的には彼らの原資料はつぎの三種類である。第一に印刷物。各時代の歴史、個人的な供述、修史官、記録作家、小説家、劇作家、滑稽斬作者や詩人、新聞や「小冊子、好色小唄集、パンフレット、情報屋、攻撃文書など、束の間に飛び去る紙片」も、裁判書記の書類、評判、記録などもおろそかにしない。第二に未刊のもの。手書き原稿、懺悔録、肉筆書筒である。さらに「一時代には生き残る他の道具、不死の他の記

念物がある」と述べ、各時代の芸術作品や手作りの道具などに執着する。各種の像、織物、彫刻家ののみ、版画家のビュラン、建築家のコンパスなどもまた風俗史家には欠かせない証言になる。

『大革命下のフランス社会史』の序文によれば、この作品の執筆中、兄弟は約一万五千の資料にあたったという。「それはこのページの中で利用されたもっとも小さな事実のうしろに、もっとも些細な言葉のうしろに、わたしたちがまさに考証にかかろうとしているひとつの資料がある、ということだ。それはまた、この私生活の歴史は、重要な歴史とはいえないまでも、少なくともまじめな歴史だ、ということだ」。

エドモンは『ある芸術家の家』¹⁰で、母と二人の叔母に連れられてメニルモンタンの骨董屋で古物漁りをした少年の日の喜びを回想している。こうした体験が尾を引いて、50年頃から、彼らは生活骨董や美術品の蒐集をはじめ、その魅力にとりつかれた。十八世紀の、とくに女性の日常生活に用いられた骨董品をあくことなく漁った。また「個人の頭や心」、持ち主の考えや気質を覗かせる未刊の原稿や手紙を求めて、売り立てや蒐集家の後を追ってパリ中を駆け巡った。『十八世紀の親しい面影』の出版事情について、彼らは簡潔に記している。「(原稿を出版者)ダンチュに300フランで売った。燃やした油や薪の代金にもならない。この二冊の本をつくるために、わたしたちは2,3000フランの肉筆書簡を買ったものだ」(56.12.25)。こうしてみれば、生活骨董や美術品の蒐集は兄弟にとってはたんなる趣味ではなく、歴史の研究費の一部であったといえる。

III 十八世紀

フランスの産業革命は七月王政下(1830~48)に始まり、第二帝政期(1852~70)に完成する。とくに第二帝政時代、フランス社会は未曾有の発展をとげている。僅々2,30年間に工業生産は倍増し、輸出量は七月王政時代の三倍に

成長し、新製品の特許登録は二倍になり、51年に3,700キロにすぎなかった鉄道網は70年には18,000キロに伸び、農産物は増収の一途を辿る。都会には銀行、百貨店が続々誕生し、パリはオスマンによって近代都市に変貌した⁹⁹。55年にジャン＝ゼリゼに開かれた万国博覧会は、産業革命の成功と近代文明の進歩を祝う一大イベントであった。大衆は熱狂し、酔い痴れ、ルナン、ユーゴー、ゴーチエ、ミシュレなどほとんどの文学者が文明の至福を謳い、蒸気機関やガス灯を讃え、未来は科学と技術にありと信じた。この進歩の神話を否定した少数派、その代表がボードレル、フローベル、ゴンクール兄弟であった。

ゴンクール学者のコップ教授は、兄弟を「十九世紀のまんまに迷い込んだ十八世紀の移民」¹⁰⁰と評している。彼らの心に十八世紀に対する偏愛を植え付けた動機はいくつか考えられる。貴族、貴族的なものに対する憧れ、これは両親の血筋から受けた天性のものだろう。旧制度の教養と雰囲気をも身につけた母親、とくに叔母の薰陶¹⁰¹。そしてこれも二人の女性の影響であるが、生活骨董や美術品への愛着など…いずれにしても彼らにとっては十八世紀は至上の時代であった。「われわれのすべての起源は、すべての性格はそこ（十八世紀）にある。近代はそこから発し、そこに遡る。それは光の時代であり、とりわけフランス的な時代である」¹⁰²。ミシュレもほとんど同時期に、十八世紀を啓蒙の時代、解放の世紀として称揚しているが、人間の完成の可能性を信じる彼にとっては、この世紀は人類の進歩についての信仰を予見するものであった。ゴンクール兄弟の場合は違う。現在自分たちを取り巻く世界を見つめれば見つめるほど、十九世紀にたいする反感がまし、前時代への傾斜を深め、十八世紀と十九世紀を対極におく。美と醜、賢と愚、高雅と卑俗の対照。「十九世紀には家具はない、ブロンズ像はない、磁器はない！ 産業のなかで芸術が語られることはけっしてなかった！」(55.8.28)。「十八世紀を研究すればするほど、その根源と目的が喜びと楽しみだったことがわかる——われわれの時代の根源と目的が金持ちになることと金銭であるように」(61.10.10)「金を遣うこと、それが

十八世紀の生活。金を集めること、それが近代生活」(62.1.19)。

両時代に対する偏愛と嫌悪はただ生活風俗、時代精神に対するばかりでなく、政治や階級制度にまで及び、ここでもまた十九世紀の平均、平等主義、付和雷同性に対して旧制度の特権と貴族的個人主義を、人民を集めた衆愚政治に、考えるエリートによる統治を、芸術に無理解な共和制に対して詩人や画家を庇護する王政を、進歩の宗教に、彼らの懐疑主義と悲観主義を対立させる。「十八世紀においては大貴族は、狂気、混乱、浪費、悪の移ろいやすい優雅さ、放蕩の高雅さと繊細さを表徴している。十九世紀における貴族はブルジョワである。彼らを象徴するのは何か？ 家族、儉約、有産階級である。もはや集団から生まれる悪はない——従ってもう集団の美德はない」(62.1.29)。愛すべきこの旧制度を倒し、にくむべき十九世紀を生み出したのは大革命である。1789年は彼らにとっては呪うべき年であった。革命家、ギロチンで象徴される当時の世相、とりわけ革命の立役者であった労働服の無頼漢たちの意地悪な悪ふざけ、人を傷つけずにはおかない嘲笑の品のなさには我慢ならない。この貧民の武器が十九世紀全体に幅をきかせている。偉大で、英雄的で、神聖なものすべてを嘲弄する不遜な風潮。平凡なものしか望まない近代デモクラシーの精神。「いづれ古い社会を殺すのは哲学でも、科学でもない。思想の偉大かつ高貴な攻撃によって消えるのではなく、じかに毒によって、フランス精神の昇汞の毒となる、悪ふざけによって消えるだろう」(68.6.30)。彼らの大革命に対する敵意はついには、腹案だけで出版にはいたらなかった『十八世紀の政体』“*L'Etat au dix-huitième siècle*” に具体化され、その序文で「自由主義に対する偉大な宣言、貴族階級の遺書を作ること。われわれの理念、われわれが皮膚の中で、下で *intus et incute* 考えているすべてのことを表明し、われわれの歴史意識を荒々しく、圧倒的に、恐れげもなく主張すること。89年の例の恩恵を徹底的に否定すること」(61.5.30) を企てている。

IV 女性

ゴングール兄弟の特異な、というより奇矯な性格のひとつに、その極端なアンチフェミニズム、女嫌い *misogynie*、女性蔑視がある。だからといって同時代の誰かれのように、彼らをホモセクスとか不能者とかきめつけるには早計で、むしろ彼らは普通以上に女性への関心が強く、つねに意識していたと思われる。『日記』に頻繁に繰り返される女性論や、小説十編のうち八つまでが女性の生涯を題材にとり、題名に女主人公の名前を用い、十二編の歴史のうち九つまでが女性の個人研究に当てられているのがその証しであろう。しかし実生活では、文芸上の庇護者となったナポレオン三世の従妹、マチルド・ボナパルト *Mathilde Bonaparte* と、ジュールの死後エドモンに母親にも亡弟にも較べられる愛情と配慮をよせたドーデー夫人、ジュリア *Julia Daudet* を例外として、彼らが女性に対して対等な愛情も尊敬も捧げたことは一度もなかった。

兄弟の生活にもっとも近かった女性は、のちに小説『ジェルミニ・ラセルトゥ』の女主人公のモデルとなるローズ・マラングルであった。ジュールが7歳のときから四半世紀、ただの家政婦の役をこえた忠実さと献身ぶりで、二人の面倒をみた彼女は、兄弟が初めてマチルド妃の晩餐に招待された同じ日に病死した。「悲しみを、喜びを、彼女はわたしたちと分け合った。わたしたちの習慣を知りつくし、わたしたちの恋人を全部知っていた。わたしたちの生活の断片であり、部屋の家具であり、青春の残骸であり、何だかしらないが優しく献身的な、もぐもぐと小言の多い、番犬さながらに見張っているものだった、わたしたちと一緒になければ、死ぬはずがないというように」(62.8.16)。『日記』ではこうして彼女を哀惜し、感謝を惜しまないが、しかし人間とは見ず、犬に例え、家具としか扱っていない。四、五日のちに隣人の口からこの忠実なローズの本性を聞かされる。多情な女で、情夫を何人も替え、その歓心を買うために主人の金をくすねたり、借金して回ったり、隠し子まであったという。死因

となった肺炎も、嫉妬にかられて一晚中男を見張って、風邪をひいたのが原因だった。「気の毒な女！ わたしたちは彼女を許そう…彼女に対する深い憐愍をおぼえる」という反面、女性不信はいっそう深く根をおろす。「しかしこの悲しい暴露によって大きな苦渋が心を覆う…女という性全体についての不信の念が、生涯わたしたちの心を占めた…その魂の二重底、嘘についての驚くべき才能、無欠の天才についての恐怖の念がわたしたちの心を捉えた」(8.21)。

兄弟の生涯に女性の影が映らないわけではない。とくに、発展家であったジュールにはコンテス・ラッサール、マリ・ルペルチエ、アンナ・デリヨンなど、数人の情婦の名前があげられるが、彼女らとの情交にしても愛情のかけらもない肉の接触到すぎず、シャンフォールのいう「皮膚の触れ合い」²⁹以上に発展しない。友人たちと娼家に入出入りしても、仲間たちのように放蕩を楽しむどころか、おぞましげに「解剖標本室」と呼んでいる。

女性に対する軽蔑、嫌悪、呪咀の毒舌にはきりが無い。その肉体については、「女性のすべての力、発達は体の中部、下部に向かって流れるようだ。骨盤、臀部、腿。男性美は高貴な部分、胸、幅広い肩、秀でた額に向っている。ヴィーナスの額は狭い。デューラーの『三美神』には頭の後部がなく、肩幅は狭く、彼女らのうちでは腰ばかりが輝き、幅をきかせている」(55.10.13)。その上愚かで、物事の表面しか見ず、正邪の判断がつかない。頭は馬車曳きなみで、文字や詩には縁がない。「スタール夫人やジョルジュ・サンドを解剖したら、やや両性具有的な構造をしているに違いない」(57.8.26)。女性のセックスに対してはとくに手厳しい。「女性はその性を生計の手段とみなしている…貧乏な女性にとっても、金持女にとっても…性はごくあっけないいくつかの色事が横切る職業である」(57.5.23)し、ゴーチエをして、「売春は女性の日常の状態だ」(63.6.22)といわしめる。ミシュレがほとんど神秘的に見た女性の生殖は、ただの繁殖器械 *machine à fécondation* であり、母性愛にしても単に動物的愛情とたたづけられる。彼らには妻も母も要らない。「わたしたちのような男

には、ほとんど躰けも教養もなく、快活で、精神は生まれたまま、ただそれだけの女が必要なのだ。そうした女は可愛い動物のようにわたしたちを喜ばせてくれるからだ…ところが情婦が社交界で揉まれ、芸術や文学を少々齧ったりしたら、美についてわたしたちの考えや意識と対等に語りたがったら、本や趣味の連れや仲間になりたいと望んだら、調子はずれのピアノさながら堪え難くなり、とたんに嫌悪の対象になる」(57.5.21)。

21歳のときジュールは、元産婆で数奇な前半生を送ってきたマリアと知り合い、情婦にする。兄弟の好みにぴったりの女性であった。「彼女が入ってくるとドッと笑い声があがる。その顔が見えるとお祭騒ぎだ。部屋にいと大はしゃぎで、田舎っぽい抱擁が続く。太った女で、縮れたブロンドの髪、それを額のまわりに搔きあげている。奇妙な優しさをたたえた青い瞳、厚い唇、明るい気持ちのいい顔、ルイXVI世風の美少年の表情。胸がはちきれんばかりのブラウス、ルーベンス風の女神もかくやの威厳」(58.3.27)。のちに彼女は、悪びれもせずに兄弟ふたりの情婦になる。「彼女はわれわれとの共同作業を承知する」(58.6.23)。もちろん、単に小説の材料を提供するだけではなく、ベッドでも二人に奉仕するという意味だ！ 兄弟との交情がもっとも永続きし、おそらくもっとも気に入られた恋人として、その姿はジュールのエッチングに残されている。

エドモンと親交のあったジュリエット・アダムは、「ゴンクール兄弟は十九世紀の女性を嫌い、理解できず、彼女らに悪意、自堕落、愚かしさしか与えなかった。十八世紀の女性に親しみ、愛したあまりである」¹⁴⁾と評しているが、十九世紀の社会や制度に対するのと同じく、彼らは両時代の女性を対比することによって、一方に対してますます傾斜を深め、反動的に他方を嫌悪したのである。

バダンテール教授は十八世紀女性について、三つの特質を指摘している¹⁵⁾。第一に彼女らの優雅さ、すなわち良い趣味についての熱狂的な好みである。心

の、精神の優雅さ、もちろん外見の優雅さもこれで、そうしたエリート社会の風俗の代表ともいえる美とモードについて、兄弟が膨大なページをさいたのもふしぎではない。ひとつの流行がゆきわたれば新しいものに移る。人から目立ちたい、注目されたい、そのためには何でも許される、たとえ少々滑稽なものであろうとも…女性たちは新しい知識を追い求める。多くは表面的な一時の流行であったが、なかには高級な学問についての本物の女学者も生まれる。「光の世紀はただに男性の天才のそれだけではない。『あらゆる知識に通暁すること、あらゆる才能の百科全書、これが十八世紀女性の夢である』。ルソーやダランベールが庇護を求め、多くの学者、詩人などをアカデミーへ送ったのは、知識層の女性のこうした精神であった。第三に彼女らは他の時代の女性には考えられない自由を享受していた。彼女らを支配するのはモードだけで、その他は肉体も、心も、精神もすべて自由であった。彼女らの性的な自由、この点での社会の変化を語らずには、当時の上流社会の女性は想像できない。そしてゴンクール兄弟は、こうした優雅で、知的で、性的な束縛を脱した十八世紀女性を憧れるのである。

といっても、庶民の女性に対してはみじんの共感も同情もない。「啓蒙の光、知性の中心にありながら、彼女らはホットトットの女性なみにその脳髓に考えない存在で、下劣きわまる粗野な存在である」¹⁰。市民階級の女性に注ぐ目もけって暖かくない。彼女らの母親としての姿しか見ていない。「彼女の生活は二つに分けられている。半分は女性の技術と才能に磨きをかけること、残りの半分は手仕事、家事、召使いの女のような疲れやすい家庭的な労役にふり向けられていた」。ここで気付くことは、市民階級の女性の本質は、異質の二つの部分からなるということだ。つまり彼女は妻であると同時に女中である。「そしてゴンクール兄弟にとっては、女性の本質は主婦ではないはずだ。そして彼らの目には、(家事にたづさわる)女性はおお女性に値するか、怪しまざるをえない。物質的、すなわち経済的束縛を脱しない限り真の女性はいえな

い。女性の本質は優雅さ、気品、身についた技術や、あるいは知識の中にある。無償でない労働、遊びでない、無欲な活動でないものはすべて、女性の品位を傷つける。こうしてみれば十九世紀の女性にたいする彼らの嫌悪は理解できる。彼女らは前時代の女性から、物質的な幸福に対する関心のみを残し、もはや存在しない、豪華な、才能に富んだ、無欲な貴族階級を真似ようという意欲を捨て去ってしまったのである。彼らの見るところ、彼女らのみが女性の真髓であり、他は女性とはいえない。『社交界の婦人のみが女性であり、他は牝だ』(55.1.13)。その数は少なかったとはいえ、ゴンクール兄弟は、彼女たち(社交界婦人)こそ事件の根源であり、あらゆるものの源泉とみなした。彼女らは自分たちの願望を、考え方を、話しかたを、言葉まで男たちに押しつけた。宮廷に命令し、大臣たちに指示し、王に影響を及ぼし、敗退するまでフランス軍を指揮した。その絶大な、密かな力は、モンテスキューをして『彼女らは一種の共和国を、国家のなかに新しい国家を作っている』(『ペルシヤ人の手紙』)と言わしめたのである。十八世紀はだから女性全能の世紀である。社会全体とまでは言わないが、少なくとも社会階級の価値観を理解するためには、女性に訊ねなければならない、われわれの歴史の例外的な時期なのである⁷⁰。九冊の女性の個人研究を発表し、さらにその集大成ともいうべき『十八世紀の女性』を纏めた兄弟に、女性史家の席を与えることに異議はあるまい。

V 新歴史の評価の変遷

新歴史の創始者として自信満々だったゴンクール兄弟の作品は、しかし僅かな支持者は別として専門家、批評家には不評を買い、大衆にはそっぽを向かれ、彼らはバイオニアの悲運を嘆くのみであった。「読者には、彼らが以前に会った人に再び会えるような、すでに知っていることを耳にするような、実質的で小さく纏った作品が必要なのだ。ごく僅かしか知られていないものは読者を逃げ腰にさせ、まったく手のついていない資料は彼らを怯えさせる。わたしが理

解しているような、時代のあらゆる面に展開するという口実で、肉筆や書簡や未刊資料の長いセットを展げる歴史、歴史の一般形式から外れた新しい、細かい、洗練された歴史がそれだ。わたしの腹案が題名の上にはっきり記され、ページ全体が四苦八苦して既知の事実の中を歩まなければならないような、分厚い歴史を書くに要する努力の二十分の一の見返りもないだろう」(57.3.16)。

『総裁政府下のフランス社会史』の序文で、著者は自分たちの歴史に加えられた非難を紹介して、簡単な弁明をしているが、これは彼らの歴史全体に対する非難でもある。(1) 逸話、些事、人や物の私的な端々まで割愛しなかった罪。弁明：筆者は二人の逸話史家、ブルタルコス、サン＝シモンを踏襲した。(2) 革命下の娼婦に筆を割き、タキツス風な純潔な筆の運びに倣わなかった罪。弁明：カエサル時代の史家はローマ社会の歴史を書かなかつたし、またネロやソクラテス時代の風俗を知りたいと思うものは、タキツスの傍らに（好色な）ユウウェナリスの作品を置いても仕方がないだろう。(3) 89年の社会の観察を地方におかずパリに限り、また著者自身地方出身と思われるのに、家族の伝承を無視した罪。弁明：著者の祖父は国民議会のバッシニ選出議員で、パリに在住した。(4) 著者の政治的意見。弁明：返答の必要なし。

兄弟が自分たちの歴史のもっともユニークな、前人未踏の道と信じたものが、批評家の俎上にあげられた。とるに足りないありふれた些事は、まじめな歴史家から見れば歴史の名に値いしない。女性の化粧や頬紅や髪型の流行に数十ページも費やすような本は、歴史書とは言えない。古い友人のバリエール F. Barrière は「デバ」紙上で、「あまりに細かいことに才能を浪費するとお小言」(57.3.16)を言うし、バルベイ・ドールヴィリ Barbey d'Aureville に到っては彼らを「文学のペルトラン軍曹」⁸⁹ときめつけた。有名な墓荒らしの名をあげて、古い事実を暴いて歴史を傷つけた吸血鬼と非難したのである。この記事に二人は大いに悩み、ジュールは「肝臓の痛みが再発し、一時は二度目の黄疸を心配した」(57.6.10)ほどだった。彼らのパリ偏重もしばしば指摘さ

れる。例えば、『十八世紀の女性』では農民女性にはまったく言及せず、女性人口がわずか20パーセントにすぎない当時のパリののみを取り上げている。しかし田舎ぎらいの兄弟にとっては、農民の男女など同じ人間とはおもえず、また地方に関する資料の乏しかった当時のことなので、筆を割く気にもならなかったのだらう。

すでに述べたように七月王政以来、十八世紀が見なおされ歴史家たちはこぞって旧制度に注目しはじめた。その意味では、ゴンクール兄弟の歴史研究は時宜をえたものであったが、その目的は正反対といえる。自由思想家たちは、過去のうちに反動に対する武器を探した。チェリ、ギゾー、ミニエなどは戦闘的な姿勢で、その著書は政治理論で埋まり、激しい糾弾にあふれる。彼らの目からすれば歴史を動かすのは民衆であり、ルイ XV 世の寵姫たちではない。歴史家の労作に値するのは、他のいかなる階級でもなく、民衆なのだ。革命を否定し、民衆を軽蔑し、貴族や旧制度を礼賛する兄弟が冷遇されるのは当然であった。「自分たちの政治的視野に目をふさがれ、彼らは伝統的歴史の意味と主題を誤解したのである」というバダンテール教授の評はまさに背筋に当たっている。

四面楚歌の中で、サント＝ブーヴ、ミシュレ、モンスレ C. Monselet などは兄弟に好意的であったが、とくにミシュレの激賞に対しては、兄弟は珍しく感激し、わざわざお礼に参上する。『「摂政時代」』の中でわれわれにじつに好意的な言葉を書いてくれたので、面識のないミシュレにお礼に行く(63. 11. 23)。リュクサンブール公園に近い家に二人を暖かく迎えたこの歴史学者は、きげんよく建築や家具についての蘊蓄を傾けたあとでこう続けた。「あなた方は観察家なんですから、ひとつこんな歴史、小間使いの歴史でも書いてみませんか」。さすがに慧眼なミシュレは兄弟を理解していた。政治家や大臣をリードする貴婦人、その貴婦人を操る才気煥発な小間使いなど、まさに兄弟のお家芸だらう。反対に、彼らの自尊心に致命的な打撃を与えたのは、「1848年以後の歴史

の進歩についての公式報告」であった。「ソルボンヌの三教授、ジェフロワ A. Geffroy, ゼレル J. Zeller, チェノ J. Thienot 氏の報告に目を通す…十八世紀及び革命の新しい歴史家は三人しかいない。ルイ・ブラン L. Blanc, ミシュレ, ジェフロワ, もちろん三人の報告者の一人だ! わたしたちについてももちろん何もない, わたしたちが手をつけたこの運動に, 未刊行物に, 才気に富み生き生きとした資料について, 歴史の下から再び見いだされた社会史について何もない」(98.2.10)。酷評, 嘲罵より残酷な黙殺である。やり場のない忿懣, 深い無力感に沈むよりほかはない。その後続く, 「批評家などというのは, 無知と羨望以外の何物でもない。政府だの文部省だの, ばかみたいなものだ」という一行には, 十年の歳月と, 資料蒐集のための莫大な費用と, 研究と執筆に惜しみなく捧げた努力と情熱が, 学者たちの無理解によって無に帰した怨念がこもっているようだ。

この頃から, あたかも兄弟の心の中で過去が現在に追放されるように, 歴史を語ることを忘れたように, 『日記』のページが増えてゆく。フローベル宛の手紙で, ジュールはこう訴えている。「無について勉強しているぼくらを, あなたはどう言うでしょう。真の無というのは歴史かもしれませんが, なぜならそれは死だからです。実際, 過去の解剖をしているうちに, ついには想像力が冷えきってしまうのです, 穴蔵の中にいるように…だから急いで空気のあるところへ, 生活へ——結局は唯一の真実の歴史である小説にもどるのです」^脚。

こうしてゴンクール兄弟は歴史研究の筆を捨てて, それまで資料の中で渉猟していた過去の生活の代わりに, 実生活の中で観察した現在のブルジョワ社会を写しとることに没頭した。その努力が記録小説という新しいジャンルに実をむすび, 写実主義文学への道を切り開いて, その隆盛の基礎を築いたのである。「わたしたちの文学の道はかなり変わっている。小説に到達すべく歴史を通ったのだ。それはほとんど慣例から外れている。とはいえわたしたちの行動はとても理にかなっている。歴史は何によって書かれるのか? 資料によって

である。そして小説の資料とは、人生以外に何があるのか？」(『文学者たち』)と認めているように、歴史は彼らの文学を生み出す触媒剤であった。

兄弟の新歴史に対する冷遇は第二次大戦後まで続く。アカデミー・ゴンクール会員のアンドレ・ビイの『ゴンクール兄弟』はもっとも定評のある評伝で、兄弟の生涯や業績に暖かい目を注いでいるが、彼らの歴史についてはアマチュアのですさび程度にしか見ていない。「たしかにゴンクール兄弟は…外交、軍事より、より生きた、より真実で確実な小さい歴史、逸話的、絵画的歴史、風俗史と呼ばれるものの研究体系に道を開いてはいる…しかしゴンクール兄弟の予測しなかったのは、経済、社会史のような目に見えない大事件の歴史は、(風俗史のように)目に見える大事件の傍らから生まれてくることを予測しなかったことだ。われわれはつねに大きな歴史の影に隠された、裏面を知りたがる。風俗史は読者を楽しませ、快く気分転換をしてくれるが、ゴンクール兄弟が、書簡類に頼って十八世紀の全貌を再構成するというとき、笑わずにはいられない」と述べ、彼らの歴史には「狭く、とるに足りない性格が目立つ」⁸²と同時代人と同じ非難をはなっている。

しかしビイの知らないところで新しい歴史学が呱呱の声をあげていた。フェーブル L. Febvre, ブロック M. Bloch, ブローデル F. Braudel など、1929年に創刊された『経済社会史年表』“*Annales d'histoire économique et sociale*”による歴史学者たちの、いわゆる「アナル派」である。ある新進の歴史学者が、アナル派の思想的傾向をこう定義している⁸³。(1) 事件の叙述を主とする歴史学に対して、問題意識に導かれた分析的歴史を目指す。(2) 主として政治史に限られた歴史に代えて、人間活動の全域にわたる歴史の研究。(3) これらの目的を達するために、言語学、社会人類学など、他の学問分野との協力をはかること。これをゴンクール兄弟の方法にあてはめれば、(1)の問題意識は兄弟にとっては、十八世紀社会の優越性と反革命であろう。分析的歴史については、兄弟には期待できない。資料を漁ってこまめに事実を紹介し、論評しては

いるが、主観的な説明や印象批評の域を出ない。本質的に小説家の彼らにとっては、科学的な処理とか分析などは手にあまるもので、いきおい文学的歴史にならざるをえなかった。(2)はそのまま兄弟の新歴史の目標に合致する。(3)の協力については、彼らが歴史に打ち込んだ時代は、多くの学問がまだ近代科学としての体系を整えていなかった上に、アナール派が重視する比較言語学や文化人類学などの存在すらあやふやだった。学問にはきっちり境界があり、専門領域にとじこもっていた時代に、共同体制を組むことなど、その意志があったとしても、不可能であったろう。在野の歴史家としてアカデミックな学者の「専門精神」 *esprit de spécialité* と戦い、無視され、傷つけられるゴンクール兄弟のドンキホーテ的な姿、それは新歴史の創始者、ゴンクール兄弟の象徴的な肖像であった。たしかに、ゴンクール兄弟の「人間の歴史」は、規模を広げすぎ、視野も狭いことはみとめざるをえないが、その意図、方法などのある部分では、彼らがアナール派にさきがけた、といってもゆるされるであろう。

二十世紀も終わりに近く、新歴史の創始者として歴史家ゴンクール兄弟に不動の地位が与えられた。小説家、ジャポニザン、アカデミー・ゴンクール、ゴンクール賞の創設者、そして現在、歴史家としての業績に輝く彼らの名は、永久にフランス文学史に特筆されるであろう。ジュールが死後の名声について思い悩んだことも、エドモンが、「ゾラやドーデーはその作品によって偉大になるばかりだ、一方わたしにできたのは、ヴァレス J. Vallès が滑稽に思い、ヴァレスが脱退してしまったアカデミーを創ることだけだった」(92.2.22)と、わが身の不遇を託ったことも、いまにして思えば杞憂にすぎなかったというべきだろう。

NOTES ET BIBLIOGRAPHIE

ゴンクール兄弟の作品の引用にあたってはつぎの版を用いた。引用後のカッコの数字は『日記』の日付。

Edmond et Jules de GONCOURT. "ŒUVRES COMPLÈTES", Slatkine Reprints,

Genève-Paris, 1986, 21 vols. (O. C. と略記)。

Edmond et Jules de GONCOURT. “*JOURNAL, MÉMOIRES DE LA VIE LITTÉRAIRE*”, Ed. Robert Laffont, Paris, 1956, 3 vols. (J. G. と略記)。

- (1) Préface de “*Chérie*”, O. C. tome 4.
- (2) Préface de Robert KOPP, J. G., tome 1.
- (3) Préface des “*Idées et Sensations*”. 1966年、『日記』の一部がこの名で出版された。
- (4) エドモンののちに二人の女兒が生まれている。一人は23年生のエミリー Émilie で32年のコレラで夭折、他は生後すぐに死亡したらしい。
- (5) “*Lettre à Louis Passy*”, (49. 9. 29), O. C. tome 13.
- (6) 「でも職業の選択について、ぼくが優柔不断だと思わないでください。ぼくは何もしないことに決めたのです」。“*Lettre à E. Chevalier*. (39. 2. 24)” *Œuvres Complètes de Gustave FLAUBERT*” tome 12, Club de l'Honnête Homme, Paris, 1974.
- (7) François FOSCA “*Edmond et Jules de Goncourt*”, Albin Michel, Paris, 1941.
- (8) “*Les Lettres Inédites À ZOLA*” publiées par P. COGNY, “*Les Cahiers naturalistes* vol. V, 1959.
- (9) Rémy de GOURMONT “*Promenades Littéraires*”, Mercure de France, Paris, 1913.
- (10) Préface du “*Journal*” de l'édition de 1887. J. G. tome 1.
- (11) Alidor DELZANT “*Les Goncourt*”, Charpentier, Paris, 1889.
- (12) 『日記』のジュールの執筆部分は、1870年1月12日で終り、引用部は別の紙に書かれて貼りつけられている。エドモンの手でほぼ定期的に書きつがれるのは4月8日から。
- (13) Fosca, op. cit.
- (14) ゴンクール兄弟の歴史書（美術史はのぞく）。
“*Histoire de la Société française pendant la Révolution*”, (1854). “*Histoire de la Société française pendant le Directoire*”, (55). “*Sophie Arnould*”, (57). “*Portraits intimes du XVIII^e Siècle*”, (1^{ère} Série) (57), (2^e Série) (58). “*Histoire de Marie-Antoinette*”, (58). “*Les Maitresses de Louis XV*”, (60) (78, 79年につきの3分冊で出版された。“*La Du Barry*”, “*Madame de Pompadour*”, “*La Duchesse de Châteauroux et ses Sœurs*”) “*La Femme au XVIII^e Siècle*” (62). エドモン単独の作品：“M^{me} St-Huberty” (82), M^{lle} Clairon” (90), “*La Guimard*” (93).
- (15) LADVOCAT “*Paris ou le Livre des cent et un*”, Léon CURMER “*Les Français par eux-mêmes*” R. KOPP. op. cit.
- (16) Alexis TOCQUEVILLE “*Ancien Régime et la Révolution*”, 1856.
- (17) Hippolytte TAINÉ “*Origines de la France Contemporaine*” 1875～93.

- (18) “*La Maison d'un Artiste*” (81), O. C. tome 16.
- (19) 貨幣流通高 (百万フラン) : (1852)261, (60)750, (70)1,554, 鉄道旅客 (千人), (52)13, (69)111, 同貨物 (千トン) : (52)3.5, (69)44, 蒸気機関 (A : 陸運, B : 海運, C : 工業器械) (1850)A : 937, B : 573, C : 5,322, (60)3,101, B : 681, C : 149,361, (70)A : 4,835, B : 973, C : 27,958, 百貨店の創立 : le Louvre (1855), Printemps (65), la Samaritaine (69).
- (20) R. Kopp, op. cit.
- (21) 兄弟の母方の叔母, クールモン夫人 Néphtalie de COURMONT は彼ら, とくにエドモンの感情生活に大きな影響を与えた。「しかしわたしが叔母のお陰を蒙ったのは美術趣味だけではない…わたしに文学趣味を伝えたのも彼女である」(92.1.30)。
- (22) “*La Femme au XVIIIe Siècle*”, O. C. tome 7.
- (23) 「社交界にあるような愛というのは, 気紛れの交換と, 肉の触れ合いにすぎない」。Sébastien CHAMFORT “*Maximes et Pensées*”.
- (24) Fosca, op. cit.
- (25) Élisabeth BADINTER, Préface de “*La Femme au dix-huitième Siècle*”, Flammarion, Paris, 1982.
- (26) “*La Femme au dix-huitième Siècle*”, O. C. tome 7.
- (27) E. Badinter, op. cit.
- (28) 1848年夏, モンバルナッス墓地で女性の死体が暴かれ凌辱された。軍と警察の捜査の結果挙げられた犯人は, 歩兵軍曹ベルトランで, 彼は翌年懲役刑を宣告された。
- (29) 「傑出した, 学識ゆたかな, 創意に富んだ作家 (両ゴンクール氏を思いて), は摂政時代とルイ XVI 世時代をしばしば比較対照した」。Michelet “*La Régence*” 1863.
- (30) “*Le recueil des rapports sur les progrès des lettres et des sciences en France*”, inséré dans “*La Rapport sur les Études historiques*” Imprimerie impériale, 1867. R. Kopp. op. cit.
- (31) “*Lettre à Flaubert*”, (60.6.16), O. C. tome 13.
- (32) André BILLY “*Les Frères Goncourt*”, Flammarion, Paris, 1954.
- (33) Peter BURKE “*The French historical Revolution, The Annales School 1929~89*”, Polity Press, 1990. (大津真作訳, 『フランス歴史学革命』, 岩波書店, 1992.